全海運所属組合の横顔

連載　第６回

九州地方海運組合連合会

その 13　細島地区海運組合

【組合の概要】

事　務　局　〒 883-0062
宮崎県日向市大字日知屋字新開第３区
細島港湾福祉センター１階
電話　0982-52-6832　FAX0982-52-3901
JR『日向市』駅下車、車で６分

理　事　長　中谷　圭五　中谷海運㈱代表取締役社長

事務局長　浅尾　新一

事務局員数　男子１名（事務局長含む）、女子１名

組合員数（休業除く）

運送事業者	１社	
貸渡事業者	１社	
利用運送業者	５社（兼業２社除く）	
合　計	７社	

所属船腹量

貨　物　船	１隻	1,600 重量ﾄﾝ
ＲＯＲＯ 船	１ 隻	3,500 重量ﾄﾝ
合　計	２隻	5,100 重量ﾄﾝ

中谷理事長（左）と浅尾専務理事

事務局のある日向市大字日知屋

細島港と内航海運

木材関連の出入荷が主力

細島港は神代の昔、神武天皇が東征される際に立ち寄られた伝説の地である。江戸時代、藩主の参勤交代も細島港を利用している。細島港の商業港地区は、天然の良港で古くから東九州の海上交通の要衝として栄えた。

徳川幕府時代は日向、薩摩、大隅の各藩主が参勤交代の際には、必ず細島港を経由しており、港口には番所を設けて、これらの出入船舶が検問された。細島港が古くから海上交通の要衝として栄えたことは紀伊国屋、河内屋、堺屋、摂津屋、播磨屋、備前屋、広島屋、高松屋、豊前屋、若松屋、唐津屋、豊後屋、高鍋屋、佐土原屋、飫肥屋、薩摩屋、琉球屋、などの地元に存在していた商家の屋号からも連想出来る。

明治初期の細島港には沖縄、鹿児島方面から京阪神方面に向かう通商船舶が入港する程度であったが、明治 13 年（1880）に四国・阪神方面との定期航路が開設されるに及び、細島港の利用は次第に増加した。明治 20 年(1887)には、オランダ人デレーケ技師の設計によって、細島港に近代的な港湾改修工事が進められ、大正元年(1912)には指定港湾に編入された。

また、大正 10 年（1921）に国鉄（現 JR）日豊線が開通し、さらに同年細島線も敷設され、

貨物の集散は急増して、昭和２年（1927）には第２種重要港湾に編入された。昭和７年(1932)から昭和15年(1940)にかけて、内務省直轄により港湾が整備されている。

戦後は、県総合開発計画の樹立に伴い、積極的な運輸交通の整備が要請され、昭和22年（1947）から港湾整備計画に基づいて埠頭施設、泊地浚渫並びに陸上施設等の改修が進められ、昭和24年（1949）に貿易港として開港指定を受け、25年（1950）には、国土総合開発の一環として、全国に先駆けて国土の総合的利用、資源開発、産業の適正配置等、宮崎県産業振興の基本施策を樹立し、県発展の拠点となった。さらに昭和26年（1951）には重要港湾に指定され、27年（1952）に細島臨海工業地帯の造成並びに工業港の建設に着手した。以来、工業港地区としても用地の造成を始め、港湾施設の整備増強を進め、昭和39年（1964）11月に開港し、地域産業を支える流通基盤として、南九州産業開発の拠点として、日向・延岡地区新産業都市の指定を得て国内船は勿論、各国の大型船舶が相次いで入港して発展してきた。

事務局。浅尾専務理事（左）と事務局員の黒木美幸さん

細島港はさらに、外貿コンテナ定期航路の開設を始め、水深13メートル岸壁、国際物流ターミナルの供用開始などにより、名実ともに大型港湾として、その機能を発揮しつつあり、RORO船の大型化に対応するための複合一貫輸送ターミナルの完成を目指している。日向市及びその近隣市町村に現在、旭化成グループ各社、日向製錬所、第一糖業、東ソー日向、メディキット、富士シリシア化学、中国木材、南日本くみあい飼料、科学飼料研究所等の工場が進出している。原木、製材、チップ、ニッケル、化学製品などが地元貨物として出荷されている。中でも木材関連（原木、製材、チップ）は輸出の50％、移出の40％を占めている。宮崎県の森林面積は県土の76％にあたり、県産材が多く活用されており、木材の集積には便利な細島港に平成26年（2014）、国内最大手の製材メーカーである中国木材（本社・広島県呉市）が進出したが、同社は全国各地に物流拠点があり、その海上輸送で貨物船やRORO船が活躍している、などが細島港の発展を支える要因となっている。

事務局入口（上）と看板

細島港湾福祉センターのビル

現在、細島港には韓国釜山向けに５社が各週１便、台湾向けに１社が週１便、中国上海向けに１社が週１便の外航コンテナ船を就航させている他、内航定期船ではコンテナ船を細島～神戸にOOCLと鈴与海運、井本商運が各週１便、RORO船を細島～堺泉北～宮崎に八興運輸が週３便、細島～東京～油津に川崎近海汽船が週２便配船している。

組合の歩みと概要

細島地区海運組合は、昭和15年（1940）１月に設立した任意団体の日向地区機帆船海運組合が母体。昭和18年（1943）に戦時統制下で木船海運協会宮崎支部に改組し、戦後の21年（1946）１月に宮崎地区機帆船組合、22年（1947）９月に細島機帆船船主会、24年（1949）４月に細島機帆船商業協同組合となり、33年（1958）３月に法人組合の綱島地区木船海運組

合を設立。同年5月に九海運に加入した。昭和38年（1963）6月に現在の細島地区海運組合に改組し、現在に至っている。

中谷圭五理事長は、平成29年（2017）6月に就任した貸渡業（運送取扱業兼業）中谷海運社長で、先々代中谷宣夫理事長（平成9年10月～27年6月／前中谷海運社長）の長男。また、浅尾新一専務理事は、元日本通運延岡支店長である。組合の所帯が小さく予算も少ないので、組合事務局は浅尾専務理事と黒木美幸事務局員の2人で九州港湾福利厚生協会細島港支部、細島港運協会、港湾災害防止協会細島支部、宮崎県細島港荷役事業協同組合、港の森育成協力会等の事務局と兼務して運営している。

細島港全景（上）と工業港地区

細島地区海運組合の所属船舶は、令和4年（2022）12月31日現在で2隻、5,498総ﾄﾝ、5,100重量ﾄﾝ。中谷海運の一般貨物船『清松丸』（499総ﾄﾝ、1,600重量ﾄﾝ、平成26年10月竣工、上組海運運航）と運送業（運送取扱業兼業）の八興運輸のＲＯＲＯ船『HAKKOひなた』（4,999総ﾄﾝ、3,500重量ﾄﾝ、令和2年2月竣工、三原汽船との共有船）がある。『HAKKOひなた』は3年前、トラックドライバーの不足や長時間労働も見据えて大型化されたもので、現在は前述の細島～堺泉北～宮崎に週3便運航しているが、将来デイリー運航が実施されることを期待する声もある。

文化と伝承

鉾島神社と大御神社

細島地区で海の守護神として尊崇されているのが鉾島（ほこしま）神社と大御（おおみ）神社である。細島地区にはこんな伝説がある。神日本磐余彦命（かむやまといわれびこのみこと）（初代神武天皇の別称）が日向より船師を率いてご東運の時、この島の口（細島港口）で大鯨を鉾でつかせたところ美女の化身となり、命乞いをしたのでこれを助けた。また、風が強くなり島に船を着けると海人たちが急ぎ帰るのでそれを呼びとめると、「大鯨が来て恐ろしい」という。神武天皇は「それでは釣りする日が少なく、出漁が自由でないであろう。この島辺に大鯨が来ぬようにしてやろう」と大鯨を退治した鉾をこの島に立てて祭らせたことから、海人たちはこの鉾を「鉾島の鉾神様」として感謝の印としたという。後世、「鉾」が「細」となり、「鉾島」が「細島」に転じたのが細島地区の地名の起源とされている。

鉾島神社本殿

鉾島神社は元々、戦国時代の日向佐土原の英傑・伊東義祐三位入道が永正年中（1504～1521）に大隈正八幡（鹿児島神宮）の分霊を旧富高村日知屋字平野に勧請奉祀したもので、その後、大永7年（1527）に現在の日向市北東部の細島商業港に面して入江を見渡す丘に移したものである。徳川幕府体制では、飫肥（おび）（現在の宮崎県南部日南市中央部）に封じられた伊東氏に代々保護され、伊東氏が江戸への参勤交代のため細島港より上下する毎に、必ず大御神

社を参拝、奉斎して祭典を執行したといわれている。神社付近の字をいまなお「八幡の上」社下の市街を「八幡町」と称するのも、神社を中心にして町名を名づけたものである。神職児玉家の旧系譜に、「羽柴美濃守公（豊臣秀長）薩州御出陣の時、児玉播磨守正直に可為神職」云々の一句があり、さらに天和２年（1682）児玉長谷の奉れる『口上記録控』によって、神職児玉家が累代宮司として奉仕して、その系譜を今に残している。棟札によれば、社殿は元治元年（1864）６月、安政３年（1856）正月に再興されている。

鉾島神社は、初め八幡神社と称していたが、大正15年（1925）４月に愛宕、大御の両神社を合祀して鉾島神社と改称した。また延宝３年（1675）６月11日銘の鐘を有し、それには「日向国細島八幡宮」と記されている。

鉾島神社の主祭神は、速秋津日子神（はやあきつひこのかみ）。伊邪那岐命（いざなぎのみこと）の伊邪那美命（いざなみのみこと）による神生みで生まれた男神。速秋津比売神（はやあきつひめのみこと）は妹であり、妻でもある。厄除開運、航海安全、海上安全、港の守護神。別名水戸神とも称す。その子は河口付近の水面を表わす沫那藝神（あわなぎのかみ）と沫那美神（あわなみのかみ）、頬那藝神（つらなぎのかみ）と頬那美神（つらなみのかみ）の２対４神と、川の水流を司る神の天之水分神（あめのみくまりのかみ）と国之水分神（くにのみくまりのかみ）の１対２神、水を汲み上げる神の天之久比奢母智神（あめのくひざもちのかみ）と国之久比奢母智神（くにのくひざもちのかみ）の１対２神で、合わせて４対８柱。国譲りを承諾した大国主命が造営された宮殿（出雲大社）で膳夫（かしわで）となった出雲市の火守神社の主祭神・櫛八玉神（くしやたまのかみ）は水戸二神の孫である。

鉾島神社のご祭神は誉田別命（ほんだわけのみこと）、息長足姫命（おきながたらしひめのみこと）、大牟須比命（おおむすびのみこと）、伊邪奈美命（いざなみのみこと）、大日霎貴命（おひるめむちのみこと）、豊受気姫命（とようけひめのみこと）である。誉田別命は、第15代天皇であり、歴史上に実在した最初の天皇・15代応神（おうじん）天皇の生前の諡号（しごう）（生前の功績を尊んで贈る名）。息長足姫命（神功皇后）は、熊襲征伐中に敵陣で没した14代仲哀（ちゅうあい）天皇の皇后で、初めての摂政として70年にわたり君臨したとされている。大牟須比命（高御産巣日神（たかみむすひのかみ））は、天地開闢（かいびゃく）の時に誕生した三神の一神で天皇守護の一神ともされる創造を神格化した神。伊邪奈美命は、伊邪那岐命（いざなぎのみこと）との二神で天神の命により創造活動の殆どを遂行した神。大日霎貴命は、皇祖神天照大御神（あまてらすおおみかみ）の別称である。豊受気姫命は、伊邪那美命から生まれた食物の神で天孫降臨の後、伊勢神宮外宮（豊受（とようけ）大神宮）の渡会（わたらい）に鎮座した食物・穀物を司る女神である。

細島地区のもうひとつの海上安全祈願神社の大御神社は、JR日豊本線『日向市』駅より約3.5km、車で10分のところにあり、国内では珍しく絶景の大海原を見渡す柱状岩を背に立つ神社である。天照大御神をご祭神とする古社で、「日向のお伊勢さま」として知られる。境内地拡張の際に発見された「さざれ石」群は、国内最大規模。

大御神社社殿（国の指定登録有形文化財）

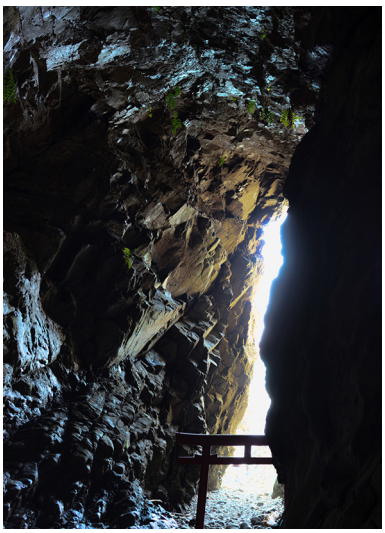
創建の年月は詳らかではないが、大御神社に伝わる『津明記』、その他の古文書によれば、「往古皇大御神日向の国高千穂に皇孫瓊々杵尊を天降しし給うた節、尊は当地を御通過遊ばされ、千畳敷の盤石にてこれより絶景の大海原を眺望され、皇祖天照皇大御神をお祀りして平安を祈念されたと伝えられた」とされ、「後世この御殿の玉石の在りし所に一宇を建て、皇大御神を勧請し、村中の鎮守と尊厳し奉る」と言う。

さざれ石（左）と“龍の霊”が沈む水窪

また、神武天皇ご東征の折りに、大鯨を退治された鉾の祠をここに建てられたことから、鉾島が細島に転じたと伝えられているが、神武天皇はこの時、伊勢ヶ

浜（脇の浜）から港に入られ、皇大御神（皇室の祖先の神々）を奉斎する御殿（現在の大御神社）に武運長久と航海安全をご祈願されたと伝えられ、大御神社の西に横たわる櫛の山と東に隆起する米の山（久米の山）は、神武天皇の先鋒の天櫛津大久命の名にちなむものであるとされる。

その後、大御神社は日知屋城主伊東氏ら歴代城主は勿論、延岡城主、幕領代官等に尊崇され、地方の民も「日向のお伊勢さま」と呼んで崇敬し、かつ親しんできたのである。最近、ことにご神徳を慕って県内外の参拝者が激増しているという。



大御神社の開場安全御守護札（左）と鵜戸神宮洞窟入口の“上り龍”

大御神社の社名は、天照皇大御神の大御（神や天皇への最高の尊敬）をいただき社名としたと伝えられている。現在の社殿の改築は昭和13年（1938）に完成し、資材は高千穂地方の神社の境内木が使用されている。社殿は、棟持柱を持つ神明造り三間社の本殿と棟を平行に置いた幣殿・拝殿からなっており、昭和9年（1924）4月に完成している。

大御神社の社殿は、建築当初の設計図面を始めとする数多くの貴重な史料が保存されている点や、社殿機能を表す多彩な屋根構成にみられるように、近代神社建築の歴史意匠を探る上で、貴重な国の登録有形文化財（平成11年10月登録）となっている。

境内西側の海岸を見下ろすと、塩見川河口の鵜戸の瀬までの海岸一帯には、日本最大級の「さざれ石」群がある。約2,000万年前、広範囲にわたって浅い海岸平野の河口付近に大量の礫が溜まり、粘土や砂などと混じり合い、さざれ石の巌として固まったものだ。中でも周囲30㍍、高さ4㍍の最大の「さざれ石」は、神座と名付けられ、天孫瓊々杵命がこの上に立ち、絶景の大海原を眺望されたものとされている。この神座のさざれ石前に丸い壁面に渦巻き状の線が刻まれた「龍の胎盤」とされる水窪があり、その底に卵状の「龍の卵」と称されるさざれ石が据えられており、溜まった水を「羊水」として、生命の源を意味する「龍の霊（玉）」を表わし、古代の龍神信仰を裏付けるものと考えられている。

また、大御神社境内東奥に位置する鵜戸神社には洞窟があり、奥から外を眺めると洞窟入口付近の形が「昇り龍」のように見えることから、龍神信仰の痕跡ではないかともされている。

【取材こぼれ話】

大御神社境内西の塩見川を渡った対岸、現在の協和病院の付近一帯は、神風特別攻撃隊の出撃の地となった富高海軍航空隊飛行場のあった場所。当時、大御神社で出撃前の最後のお祓いを受ける隊員たちが数多くいたという。ここから飛び立った神風特攻隊は、大御神社の上空を過ぎた後、鹿児島県の鹿屋を中心とした海軍基地で最後の給油をし、飛行に旅立ったとされている。大御神社は、その出撃基地近くにあったため、米軍の襲撃を受けており、社殿には銃撃の跡が残っている。

平成17年（2019）のラグビーワールドカップ日本大会では、日本代表が事前キャンプ地を宮崎として、大御神社で必勝祈願をしている。日本代表が4戦全勝でベスト8入りを果たしたのは、そのご利益として、参拝者が増えたともいわれている。